

第27回FDフォーラム
報告集

第1分科会

初年次教育が 大学教育に果たす役割を考える

報告者

田中 恵美子 氏 東京家政大学 人文学部 教授
高島 淳子 氏 京都産業大学 法学部 教授
長廣 利崇 氏 和歌山大学 経済学部 教授

コーディネーター

山下 麻衣 氏 同志社大学 商学部 准教授

- | | | |
|------|--|----------|
| P1～ | コーディネーターによる総括 | 山下 麻衣 氏 |
| P3～ | 趣旨説明 | 山下 麻衣 氏 |
| P6～ | 講演1. 「社会問題を学ぶ初年次教育
—学科単位と学科横断の方法で：東京家政大学の実践例」 | 田中 恵美子 氏 |
| P16～ | 講演2. 「学生と教員の協働を軸とした初年次教育
：京都産業大学法学部の実践例」 | 高島 淳子 氏 |
| P29～ | 講演3. 「職業と学問との融合：和歌山大学経済学部の実践例」 | 長廣 利崇 氏 |

初年次教育が大学教育に果たす役割を考える

コーディネーター

山下 麻衣 氏(同志社大学 商学部 准教授)

○ シンポジウム・分科会のねらい

第1分科会「初年次教育が大学教育に果たす役割を考える」開催の目的は、初年次教育導入の経緯、具体的な実践内容、新入生および教員が実感する教育効果、直面する課題を示した上で、初年次教育の今後を、参加者と共に探ることにある。

初年次教育の内容は、スタディスキルの習得、学問への動機付け、専門教育への導入、学習習慣の確立、情報リテラシーの習得、建学の精神の理解など、大学の教育理念、学部の教育方針によって、様々である。

大学は、初年次教育を通して、多様化する学生それぞれの満足度を上げつつも、教育効果をより高めるために、いかなる創意工夫を行ってきたのか。本分科会における情報共有によって、今後の初年次教育のあり方を深く考える場を提供することがねらいであった。

○ 報告の概要

田中恵美子氏（東京家政大学）が、「社会問題を学ぶ初年次教育」において、学科単位と学科横断型の内容を盛り込んだ初年次教育の実践例を報告した。

高島淳子氏（京都産業大学）が、「学生と教員の協働を軸とした初年次教育-京都産業大学法学部の実践例」において、1年次生向けの導入科目に SA 制度を導入した経緯、実践、課題を示した。

長廣利崇氏（和歌山大学）は、「職業と学問との融合：和歌山大学経済学部の実践例」において、大学における初年次教育導入に関する歴史的プロセスを踏まえた基礎演習の内容と運営上の課題に関する報告を行なった。

○ 報告に対する質疑、ならびに、全体討議の内容

各報告に対して多く寄せられた質問の中心的な内容は、授業運営の方法、および、授業を実践した上での教員が実感した効果と課題であった。以下では、3人の報告者による解答のポイントを要約する。

田中氏の報告によって、第1に、「歴史からの学び」および「社会への関心の喚起」を目指した実践、第2に、グループ・ディスカッションの実践による「クリティカル・シンキングの意識づけ」、「事前事後の課題の到達度の上昇を根拠とする教育効果」が明らかになった。第3に、「グループワークを実践する上での雰囲気作りの重要性とその課題」も浮き彫りとなった。

高島氏の報告によって、第1に、教育目標としての「SA の発信力および実践力の向上」が示された。第2に、初年次教育における SA 導入が実現した理由に関して、前段階における「学生の履修相談アドバイザーとしての活用」という素地を知り得た。第3に、SA と教員との初年次教育における協働がより円滑になされるポイントとしての「教員による学生に対する期待感の具体的かつ積極的な発信」という示唆があった。

長廣氏の報告によって、第1に、学生の発言を促す教員の工夫に関する具体例、第2に、

〈第1分科会〉

初年次教育が大学教育に果たす役割を考える

コーディネーター

山下 麻衣 氏(同志社大学 商学部 准教授)

統一されたシラバスのもとにありつつも教員間における内容の差異および難易度をどのように捉えるのかという課題の提示、第3に、学習成果を学生自らで振り返ることの重要性、第4に、初年次教育におけるキャリア教育の位置付け、以上が明らかにされた。

以上、本分科会では、田中氏の報告によって、大学への帰属意識の育成方法や社会を見つめる視点の醸成方法を知ることができ、高島氏の報告によって、授業は誰のものであって、どの様にどう創っていくのかを具体的に学べる機会となり、長廣氏の報告によって、「職業」と「学問」の融合という課題とその歴史性をより深く知ることができた。

今回の報告テーマは初年次教育ではあったが、本分科会での議論によって、つまるところ、大学は、将来、何をする場になっていくのかを考える一つの機会になったのではないかと考える。

第1分科会 9:30-11:30

初年次教育が大学教育に果たす役割を考える

コーディネーター

山下麻衣(同志社大学 商学部)

2021年度第27回 FDフォーラム

大学教育の「場」を問い直す

オンライン開催

大学コンソーシアム京都



09:33-9:35 「趣旨説明」

プログラム

同志社大学商学部 准教授 山下麻衣

09:35-10:05 講演1.「社会問題を学ぶ初年次教育—学科単位と学科横断の方法で: 東京家政大学の実践例」

東京家政大学人文学部 教育福祉学科 教授 田中恵美子氏

10:05-10:35 講演2.「学生と教員の協働を軸とした初年次教育: 京都産業大学法学部の実践例」

京都産業大学法学部 教授 高畠淳子氏

10:35-11:05 講演3.「職業と学問との融合: 和歌山大学経済学部の実践例」

和歌山大学経済学部 教授 長廣利崇氏

11:05-11:30 質疑応答

初年次教育の定義と実施状況

定義

高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの。

実施状況

H23:512大学(70%) → H30:631大学(85%)

学部段階において、初年次教育でプレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラムを実施している大学数

調査対象:国公立782大学(短期大学、平成30年度に学生の募集を停止した大学を除く。)

・調査方法:文部科学省ホームページに調査票・回答票等を掲載し、全大学に回答依頼の文書を発出。各大学の記入後に回答票を回収、集計。回答率:97%(761大学が回答。うち、学部段階の母数は国立86大学、公立85大学、私立590大学の計761大学)

(出所)文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について(平成30年度)」

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00007.htm 2022年1月31日閲覧

本分科会開催の狙い

なぜ？何を？どのように？

- 実践内容、創意工夫、教育効果、直面する課題

初年次教育の将来的なあり方とは？

-初年次教育の普遍化と多様化

(山田礼子「大学の機能分化と初年次教育-新入生像を手がかりに」『日本労働研究雑誌』No.629,December 2012,33頁。)

報告内容から浮き彫りとなる課題

田中報告

帰属意識の育成方法
社会を見つめる視点の醸成

高畠報告

授業は誰のものか。
授業はどう創っていくのか。

長廣報告

「職業」と「学問」の融合という課題
その歴史性



大学は、将来、何をする場になっていくのか

-初年次教育は誰によってどのように形づくられてきたのか
-今後の方向性

社会問題を学ぶ初年次教育

学科単位と学科横断の方法で－東京家政大学の実践例

東京家政大学 田中恵美子

自己紹介

- 東京家政大学 教育福祉学科 教員
- 教育福祉＝社会教育＋社会福祉＋心理
- 社会福祉、特に障害福祉・障害学が専門
- 障害者の自立生活、結婚、子育て…→地域での暮らしの支援について研究
- 障害の社会モデルの考え方を広めていく

報告の内容

はじめに

1. 問題の所在
2. 製作プロセス 学科横断型・学科単位
3. 授業の内容 学科横断型・学科単位
4. 成果 学科横断型・学科単位

おわりに

はじめに

東京家政大学について

- ・所在地：東京都板橋区／埼玉県狭山市
- ・歴史：創立1881年（創立141年）校祖渡邊辰五郎が本郷湯島の自宅に「女性に技を身に付け、その技を通して社会的自立を計り、時代の動向を見通していく創造性に富む**女性を育てる**」ことを目的に『和洋裁縫伝習所』を開設
- ・構成：4学部12学科＋短大 学生数：大学6,438人 短大377人
教員数：251人（令和1年5月1日現在）
- ・手に職を付けて卒業する＝栄養士、保育士、社会福祉士、看護師等
- ・就職も頑張っている

「本当に就職に強い大学ランキング」トップ150（17位）

<https://toyokeizai.net/articles/-/456044>

大学紹介 <https://www.tokyo-kasei.ac.jp/about/number.html>

校祖・渡邊辰五郎と
建学の精神「自主自律」



東京家政大学
校祖

渡邊辰五郎

和洋裁縫伝習所を創設し、女子教育の先駆者として活躍した。東京家政大学の前身となる女子商業学校を創設し、女子教育の発展に貢献した。

真摯の知識と生
明敏の眼、真摯に
に手は執るべきだ
かたのでも、その
真摯を教えること
に努めた。その
職教技法を編み出
るに努めた。その
た。辰五郎は学
自守である。教育す
の真摯、真摯に
なる和洋裁縫伝習
所に専念するよに
に努めた。その
女性教育の先
進者である。あ
かに受け継がれて
新しい女性の姿

1. 問題の所在（2016年当時）

本学が抱えていた問題：

- 大学としての初年次教育の不在→各学科ごとに実施
- 自校教育科目の未徹底→私立大学として建学の精神を伝える授業の必要性（100名定員の選択科目 履修者は50名（1400名））
- アクティブ・ラーニング形式の授業が少ない
- 障害に対する関心低（障害者差別解消法制定2013年、施行2016年）障がい学生支援委員会 2016年発足

問題解決の糸口

- 2019年に新カリキュラム実施
→キャップ制、初年次教育科目・自校教育科目（全学）
 - 学長と学修・教育開発センター所長（当時）の思いが一致
- ☆学長：東京家政大学の歴史を知る全学的な自校教育科目が必要
- ☆学修・教育開発センター所長：あるイベントで他大学が実施していた全学共通初年次科目の紹介を知り、本学の学生が学科の枠内で過ごして卒業していくのが惜しい



東京家政大学の学生としてのアイデンティティを醸成し、誇りをもって卒業してほしいという思い

〇〇 障害の授業

2.1 製作プロセスー学科横断型

- 2014年4月 学修・教育開発センター設立
- 2016年10月 第5回 委員会で自校教育科目開設準備委員会の設置承認
- 2016年11月 第1回 自校教育科目開設準備委員会
～臨時を含む10回の準備委員会＋2回小委員会＋3回分科会
プロジェクト「東京家政大学の歴史」「社会と向き合う」
- 2018年4月 試行授業スタート（前期2 後期2）
- 2019年4月 本格的に授業スタート

2.2 製作プロセスー学科単位

- 2017年8月 第1回打ち合わせ（障害当事者（肢体・発達）で講師経験豊富）
- 2017年10月 大学間連携研究に採択される
「障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた教材の開発及び授業展開の構築」
～教材の準備（映像：台本、撮影、編集）
- 2018年4月 ファシリテーター養成 テキストブック製作
- 2019年4月 授業スタート

3.1-1 授業の内容－学科横断型

- 特徴：学科横断、協同学習、2つのプロジェクト（「歴史から学ぶ」「社会と向き合う」）、毎回事後学習課題
 - 協同学習：2回 グループの相互理解（傾聴・自己紹介等）・約束事を決める
 - 「歴史から学ぶ」：現代→過去 さかのぼる エキスパート活動・ジグソー活動
- ① 各学科の特徴→大学の特徴（学び、学生、将来）
 - ② 現代社会における女性の状況と上級生の思い
 - ③ 東京家政大学の開学期（戦後）動画視聴（事前学習）
 - ④ 東京家政大学の前身（創設期～戦中）

3.1-2 授業の内容－学科横断型

- 「社会と向き合う」：（チーム変更：ルール決め）ブレインストーミング・KJ法、評価としてルーブリック
- ① 女性が活躍できる社会とは？そのために必要なことは？女性の活躍を阻む社会問題について調べ、考え、意見交換
 - ② 取り組むべきテーマを決め、解決策を考え、発表
 - a. テーマの選定
 - b. テーマへの取り組み
 - c. 発表の準備・ポスター作製
 - d. 発表

3.2-1 授業の内容－学科単位

- 目的：障害の社会モデルをわかりやすく伝える
 - 障害の社会モデル=障害者権利条約（2006年）国際的なスタンダードであるにもかかわらず、浸透していない
 - 障害平等研修（DET: Disability Equality Training）→最低3時間～
 - 英語圏で開発されたため、英語の教材が主（動画）
- 方法：教材の開発、1時間（90分～100分）の設計
 - 教材の開発（テキスト、動画）
 - ファシリテーターの養成：障害当事者であること（+教員がわかっていなくても授業が展開できる）
- 実施：2019年4学科、2020年3学科、2021年2学科

3.2-2 授業の内容－学科単位

- 内容：
 - ① ファシリテーターの自己紹介（障害＋生活）
 - ② 映像前半視聴（大学生がぬいぐるみを着て“障害体験”）
 - ③ 個人ワーク（見た映像の中で見つけた“障害”を書き出す）
 - ④ グループワーク（個人ワークの確認）
 - ⑤ 映像後半視聴（障害の社会モデルの説明）
 - ⑥ ファシリテーターの経験を紹介して障害の社会モデルの理解を深める
 - ⑦ 個人ワーク
 - a.映像の中で出てきた“障害”の解決方法を医学モデルと社会モデルで書き出してみる
 - b.自分の“困りごと”を考え、その解決方法を医学モデルと社会モデルで書き出してみる。
 - ⑧ （時間があれば）グループでシェア

4.-1 成果－学科横断型

- 東京家政大学HP スタートアップセミナー自主自律
- https://www.tokyo-kasei.ac.jp/campus_support/cred/startupseminar_top.html (20210122)
- 広報誌
 - https://www.tokyo-kasei.ac.jp/campus_support/cred/startup_05.pdf
 - https://www.tokyo-kasei.ac.jp/campus_support/cred/startup_12.pdf
- 教員・SAへのアンケート→授業改善

4.-2-1 成果－学科単位

- 2019年6月 2クラス、10月 1クラス
- ファシリテーター：肢体不自由者（2）、発達障害者（1）
- 受講後6ヶ月調査（回収率82%）
- 調査内容：
 - 障害関連の用語の知識 ・授業前後の障害のとらえ方の変化
 - 授業後に実際にやったこと、行動に現れたこと
 - 障害に関連する体験の有無と時期 ・感想
- 分析：自由記述内容の授業前後の割合、類似内容の集約。頻出後を文脈と共起ネットワークにより分析（KH Coder使用）

4.-2-1 成果－学科単位

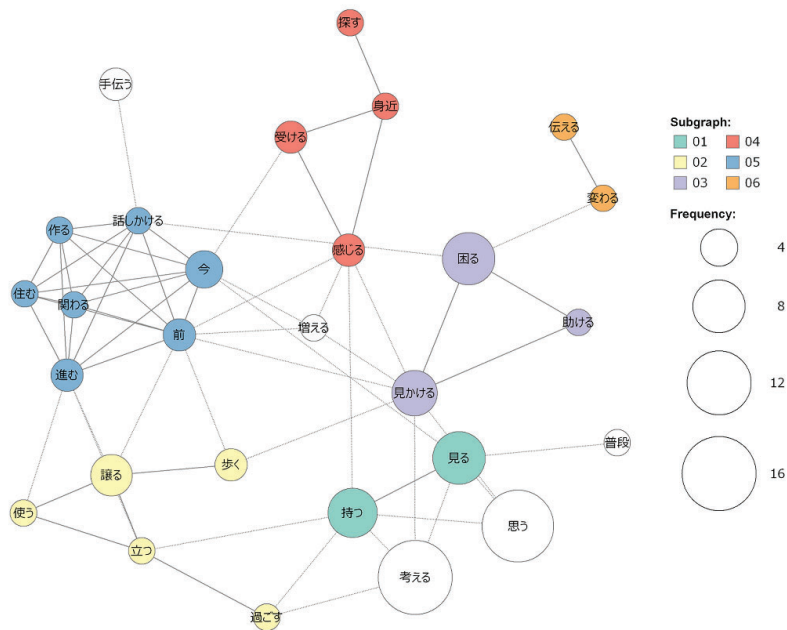
- 障害のとらえ方に変化
 - 96%の学生に変化 「かわいそう」「憐れむべき」「個人的問題」「自立していない」「一方的な支援」「自分には関係ないこと」
→「社会的障壁」「物理的環境要因」「社会モデルの理解」「意識」
- 受講後に実際にやって見たこと
 - 86%の学生が回答「声かけなど実際に行動した」「環境の見直し、意識化」「ボランティアなど直接支援」
- 障害とは何か
 - 「社会」28件、「個性」18件、「人」13件、「生きる」11件、「生活」10件 共起ネットワークでは、「社会」「知る」「感じる」「変わる」「社会モデル」
- 当事者のファシリテーターの有用性
 - 感想77件中30件にファシリテーターの記述：貴重な体験、障害者の実態や気持ちの理解、自分の誤った認識への気づき、理解の深化

障害の捉え方

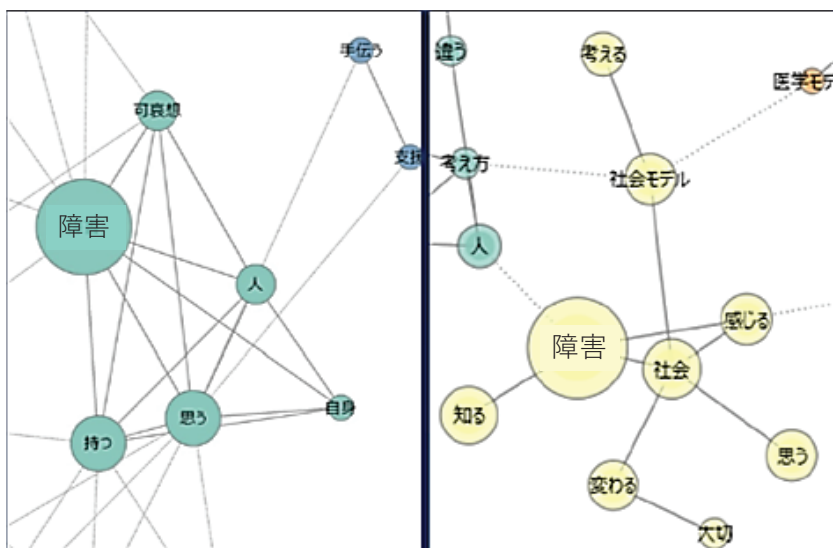
事前

事後

事前の捉え方	具体的記述	事後の捉え方の記述	具体的内容
障害・障害者への誤った認識 (29件)	可哀想	社会モデル(47件)	社会的障壁
	個人的問題		物理的環境要因
	自立していない		モデルの違い・理解
	一方的な支援		人の意識
	自分には関係のないこと		当事者理解(22件)
	憐れむべき		障害者の自立
知識の不足や未学習 (15件)	障害の社会モデルの知識不足	知識の拡大、深化(16件)	個性
	障害の種類知識不足		自分が変わる必要性(8件)



受講後の行動に関する共起ネットワーク



事前 事後
「障害」の共起ネットワーク比較

受講後の意見(一部)

Aさん
「障害者とはなにか、障害者への支援についてずっと考えている」

Bさん
「ボランティアを始めた」

Cさん
「障害の捉え方が大きく変わった」

おわりに

- 複数の教員で同じ内容を実施➡専門ではない課題を教員は学生とともに学ぶ（準備：教材＋研修）
 - 女子大の創設自体がもともと女性の社会的地位という社会問題とリンクしている。
 - 「マイノリティの人権は理念的に極力守られるべきだが、具体的にどういう風に、またどこまで守られるかは多数決に従ってマジョリティが決める」（四元・千羽 2017:75）
- ➡物事の優先順位は（その時の）マジョリティの価値に左右される

引用

- 田中恵美子・野澤純子 2021 「障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた授業の開発(1)」日本発達障害学会発表
- 野澤純子・田中恵美子 2021 「障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた授業の開発(2)」日本発達障害学会発表
- 四元正弘・千羽ひとみ 2017 『ダイバーシティとマーケティング』 宣伝会議



「学生と教員の協働を軸とした 初年次教育 —京都産業大学法学部の実践例—」

2022.2.20 FDフォーラム 第1分科会
京都産業大学 法学部 高畠淳子

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

自己紹介

- 京都産業大学
- 1965年創立 • 10学部 • 在学生1万4千人強
- 法学部所属
- 法律学科/法政策学科
- 社会保障法、労働法
- 副学部長、カリキュラム委員長
- 「法教育演習」担当5年目



KYOTO SANGYO UNIVERSITY



今日の報告の概要

1. 初年次教育導入の経緯
 - ・「プレップセミナー」
 2. SA制度導入の経緯
 - ・「法教育演習」
 3. 協働の実践例
 4. 今後の課題
- おわりに

SA=
Student Assistant

SSA=
Super Student
Assistant



1. 初年次教育導入の 経緯

1. 初年次教育導入の経緯

- 法学部 1年次生向けの導入科目「プレップセミナー」
- 科目の開設当初は、1年次秋学期に開講
- 当初の授業内容は、「法律学のための初年次教育」を中心としつつも担当教員によってばらつきあり
- PCスキル・要約等、より基礎的な能力を養成する必要性

プレップセミナーの内容の精査と共通化が課題に

1. 「プレップセミナー」の再構築

内容の精査	内容の共通化
<ol style="list-style-type: none"> 1. 大学/法学部のガイダンス <ul style="list-style-type: none"> • 大学生/法学部生になる 2. アカデミックスキルの習得 <ul style="list-style-type: none"> • PC/図書館の利用方法 3. 法学の基礎知識や能力の習得 <ul style="list-style-type: none"> • 要約文や小論文の作成 • ディベートの実施 • 社会問題への関心 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「<u>パッケージ</u>」の提示 <ul style="list-style-type: none"> • 15回分の授業案を提示 • 課題、定期試験も提示 • 一部の利用、不採用も可 2. 評価方法の統一 <ul style="list-style-type: none"> • 毎回の課題と最終課題の比率 • 情報倫理課題を必須化 • 欠席回数扱い



1. 「プレップセミナー」共通化の課題

- 内容豊富な「パッケージ」を授業に盛り込んで進めていくには、アシスタントがいたほうが良い
 - ・アイスブレイク、ディベートの司会/タイムキーパー
 - ・課題の添削等
- 1年次生が大学生/法学部生になるには、先輩の姿(ロールモデル)を見せることが効果的

先輩学生が「プレップセミナー」に参画する仕組みを検討



2. SA制度導入の経緯

2. SA制度導入の経緯

- 2003年度から、学生を履修相談アドバイザーとして雇用
- 先輩学生が後輩学生のお手本に
- アドバイザーは、自主的に勉強会等を企画運営
- 共通教育科目「自己発見と大学生活」に学生ファシリテーターが参画
- 法学部の専門教育の中に、先輩学生が後輩学生をサポートするSA制度を導入することに
- その後、法政策学科「法政策基礎リサーチ」にもSAを配置

2. SA制度導入の経緯

- 2012年度「プレップセミナー」に試験的にSA配置
- 2013年度「法教育演習Ⅰ」開講、SA養成スタート
 - 「プレップセミナー」のパッケージ化の内容検討
- 2014年度「プレップセミナー」に正式にSA配置
 - 「プレップセミナー」のパッケージ化もスタート
- 「法教育演習Ⅲ」(2015)、「法教育演習Ⅳ」(2021)開講
 - 「法教育演習Ⅰ」にSSA配置

学生と教員の協働

2. 各科目の特徴

科目名	配当年次	開講時期	履修条件等	科目の内容
プレップセミナー	1年次	春	学科別に自動登録。	法学部の初年次教育
法教育演習Ⅰ	1年次	秋	「プレップセミナー」「民法概論」を習得済み	SAに必要な能力の育成
法教育演習Ⅱ	2年次	春集	「法教育演習Ⅰ」を70点以上で習得済み	「プレップセミナー」のSAとして活動
法教育演習Ⅲ	2年次	春集	「法教育演習Ⅱ」を習得済み	「プレップセミナー」のSAとして二度目の活動
法教育演習Ⅳ	2年次	秋集	「法教育演習Ⅰ/Ⅱ」を習得済み	「法教育演習Ⅰ」のSAとして活動

「プレップセミナー」(2021)の授業内容

- 1 ガイダンス・アイスブレイク
- 2 PC実習・アイスブレイク
- 3 法学部のガイダンス
- 4 GPSアカデミックと振り返り
- 5 要約(PC記事検索、タイピング)
- 6 ディベートの体験
- 7 ディベートの実践①
- 8 ディベートの実践②
- 9 ディベートの論理構造
- 10 ディベートの実践③(文献検索を含む)
- 11 ディベートの実践④(文献検索を含む)
- 12 小論文
- 13 ディベートの実践⑤インタークラスディベート大会
- 14 キャリア・ガイダンス
- 15 全体の振り返り

大学生/法学部生になるために必要な知識とスキルの習得

アカデミックスキルの習得

法学部で学ぶために必要な知識とスキルの習得

「法教育演習 I」(2021)の授業内容



- 1 ガイダンス・アイスブレイキング
- 2 「躓き・克服」経験
- 3 要約力の重要性
- 4 AL科目の調査レポートとプレゼン
- 5 プレップセミナー・パッケージコースの概要、要約文添削の実践
- 6 デイベート(1)体験
- 7 デイベート(2)実践
- 8 デイベートのテーマ設定・リサーチの方法・脚注のつけ方
- 9 デイベート(3)論理構造の分析
- 10 デイベート(4)リサーチに基づくデイベート
- 11 デイベートに基づく脚注付き小論文の書き方
- 12 ファシリテーション研修(1)アイスブレイキング
- 13 ファシリテーション研修(2)観察とポジティブ・フィードバック
- 14 ファシリテーション研修(3)SAロールプレイング
- 15 全体の振り返りとプロジェクトの実施計画

プレップセミナーの内容理解

プレップセミナーの内容
深化/授業サポート
に必要な能力の習得

教員と協働するため
に必要な能力の習得

「法教育演習 II~IV」(2021)の授業内容



- ・「プレップセミナー」のSA、または「法教育演習 I」のSSAとして活動し、毎回観察レポートを提出する (実習15コマ)
- ・以下の活動を行う (演習8コマ)
 - ①新入学生のためのイベントの企画・運営
 - ②毎週のランチミーティングで、報告、ディスカッションをし、担当の「プレップセミナー」にフィードバックする。
 - ③インタークラスデイベート大会等の企画・運営
 - ④まとめレポートを作成し、合同SAミーティングで報告、ディスカッション、次年度のプレップセミナーへのフィードバックを行う。

2. 「プレップセミナー」と「法教育演習」の違い

- 「プレップセミナー」では、受講生として法学部で学ぶための基礎知識や能力を習得
- 「法教育演習Ⅰ」で、受講生としてSAとなるための能力や知識を習得し、かつ協働者としての視点を獲得
- 「法教育演習Ⅱ～Ⅳ」でSAとして活動することで、受講生から協働者に視点が転換される

教員とSAが協働して教育にあたる素地ができる

3. 協働の実践例



3. 主なSA/SSA活動

1. 授業中の活動
 - ・アイスブレイクの実施
 - ・グループワークのサポート
 - ・ディベートの司会/タイムキーパー/コメンテーター
 - ・1年次生(受講生)からの質問対応
 - ・SA自身の体験共有
2. 授業後の活動
 - ・要約課題の添削
 - ・担当教員との打ち合わせ
3. 授業外の活動
 - ・新入生オリエンテーションでのイベントの企画運営
 - ・1年次生(受講生)向けのイベントの企画運営



3. 協働の実践例 | オンライン授業の開発

- ・ 2020年4月、オンライン授業スタート
- ・ 授業内容や実施方法について、「法教育演習」担当教員とSAで何度も打ち合わせ
- ・ 協働でオンライン授業の内容を検討
 - ・ 教材開発
 - ・ ディベート動画
 - ・ Teamsでのコミュニケーション
- ・ SA自ら、オンラインイベントを企画運営
 - ・ WEB J'sコミュニケーション/J'sひろば
 - ・ SAアワー

3. 協働の実践例2—SAによるプロジェクト



1. 新入生向けQ&A集の作成

- ・「法教育演習 I」第2回「躓きと克服」がきっかけ
- ・SA自身の経験をもとに、SA/SSAが企画し、完成させる
- ・新入生オリエンテーションで配布等の予定

2. SA向けアイスブレイク集の作成

- ・プレップセミナーでのSAの役割の一つがアイスブレイク
- ・授業内容と関連付けた内容を考案する者も
- ・SA/SSAの参考書として活用する予定

3. 協働の実践例3—SSAによる授業の企画運営



- ・「法教育演習 I」は、4クラス開講（計50名程度）
- ・4クラスの合同授業の企画運営をSSAが行った
- ・合同授業は例年実施、運営の多くはSSAが担ってきた

- ・2021年度は、SSA自ら企画し、運営にあたった
- ・4クラス間の交流
- ・クラス対抗アイスブレイク大会
- ・新入生向けQ&A集作成に向けたブレインストーミング



3. 協働の実践例4ー振り返りによる授業改善

- 担当教員がSA/SSAと授業運営について打ち合わせを重ねる中で、授業の改善点が浮かび上がる。
 - 授業内容で理解が難しかった点
 - 課題の理解が不十分だった点
- SA/SSAからは、率直で建設的な意見が寄せられる。
- 次週以降の授業や次年度の授業改善に役立てる。
- SAが教員と受講生の橋渡し役を果たしている。



4. 今後の課題

4. 今後の課題

- 「プレップセミナー」の統一化
 - 教員による授業内容/SA活用方法のばらつき
- 「法教育演習Ⅰ」の内容改善
 - SAスキルや法的思考のさらなる向上
 - 他科目にSA配置を展開させる
- 「法教育演習Ⅰ」の受講者数、SA/SSAの申請数の増加
 - 倍増させて、法学部の活性化に

おわりに

- プレップセミナーは、法学部の1年次生同士、学年を超えた縦のつながりを作り、学びの場・交流の場となっている。
- 法教育演習は、意欲的な学生同士の縦横のつながりを作り、主体的な学びの場・変革のための行動の場となっている。
- 法学部の学業成績、卒業後の進路にプラスの影響がある
- SA経験者の成長を可視化したい
- 大学/学部内外での波及効果を高めたい

参考資料

- 第23回(2018)FDフォーラム第1分科会「学生ファシリテーター/スチューデント・アシスタント協働型の授業と学び場づくり:実践事例と将来像」(報告者:中井歩)
- 伊藤琴音、吉永一行「法学部「プレップセミナー」におけるスチューデント・アシスタント(SA)の試み」高等教育フォーラム3巻pp.39-43(2013)
- 二本柳高信、中西勝彦、中井歩「第6回法政研究会報告FD:法学部1年次生に対する教育のあり方を中心に」産大法学46巻3号pp.425-421(2012)

職業と学問との融合：和歌山大学経済学部の実践例

和歌山大学 長廣利崇

自己紹介

- 長廣利崇（和歌山大学経済学部）
- 副学部長／学生委員長／キャリア教育・支援委員長
- 近現代日本経済史・経営史
- 『高等商業学校の経営史』（2017年，有斐閣）



大学（文系）での学びの全般的課題

「職業」と「学問」をどう融合させるか??

(1) 職業人としての基礎力（汎用性） = 「職業」

(2) 学術的体系（専門性） = 「学問」

1930年代から議論されてきた問題

初年次教育を考える

社会的な必要性（社会人基礎力・・・）

+

個々の大学の個別性（教育方針・・・）

↓

教育のあり方（初年次教育・・・）

初年次教育の歴史的プロセス

和歌山大学経済学部の成り立ち

- 1922年に官立和歌山高等商業学校として設立
 - 戦後教育改革で4年制の和歌山大学経済学部となる
 - 高等商業学校では実業的教育よりも学術的研究が目指される
 - 1970年代からの大学の大衆化に伴い、学生の学術的志向が弱まる
- 初年次教育の必要性

コンサルテーションの制度化

- 少なくとも1970年代から実施されている。
- 「本学部の教官が担当し，1年次生のみを対象に学習上の指導，読書会，大学生活への指導助言を行うとともに，教官と学生の親睦を図る目的のもとに設けられ，一教官当たり10名のグループで構成される」（和歌山大学広報委員会，1990年版）

→ゼミナールの初年次版＝学問への入り口（専門を簡単に説明）

基礎演習の開講（1994年）

- コンサルテーションから基礎演習へ
- 「1年生を対象に設けられた一般教養科目であり，**教官の専攻分野にかかわる諸問題**について，対話・討論形式で授業を行い，単なる知識や考え方の修得ではなく，直接教官の学問的人格に触れることができる」（和歌山大学広報委員会，1994年版）
- 自由選択 専門性で選ぶ（例えば「会社法」など）
- コンサルテーションに内容は等しい＝学問への入り口

1997年の基礎演習の改革

- 入門書の講読や討論
 - 単なる知識や考え方の修得だけでなく，新入生に「大学」での勉強に慣れてもらうためのもの
 - 専門的な勉強ばかりではなく，図書館やパソコンの使い方の指導，授業や大学生活についての様々な情報提供，工場見学など内容は多岐にわたる
- 専門性が弱まり，専門分野共通の汎用性が強まる

経済産業省の「社会人基礎力」（2006年）前後

- 2006年前後に基礎演習の方針が検討される
 - 統一した授業内容が目指される
 - 読む・書く・話す能力の向上に重点がおかれる。
-
- 新入生が大学で学ぶ上での必要不可欠な知識を深めるものである。プレゼンテーション、レジュメ作成、文章表現、文献検索、読解の方法を学ぶ。数人のグループによって統一されたテーマを調査する方法を学ぶ」（2007年度「基礎演習シラバス」）。

当時の基礎演習の問題

- 当時の基礎演習の担当者会議
 - 大学で教えるべきことなのか？（必要性）
 - 大学は就職予備校ではない（必要性）
 - 専門的講義とあまりにもかけ離れている（実効性）
- 原則的にシラバスは担当教員の自由
 - 自分の専門分野の内容を講義する教員・・・
 - 推奨された内容に従う教員・・・

基礎演習のシラバス（2007年）

〔授業スケジュール〕

- 第1回 ガイダンスと学内施設の使用法
- 第2回 経済学部での学び方、グループ研究のテーマ設定
- 第3回 文献検索の方法
- 第4回 プレゼンテーションの方法
- 第5回 レジューメの作成方法
- 第6回 文章表現の方法
- 第7回 必要文献の報告（グループ発表）
- 第8回 文献の輪読
- 第9回 グループ研究の中間報告
- 第10回 討議
- 第12回 討議
- 第13回 グループ研究の本報告
- 第14回 グループ研究の報告書の提出

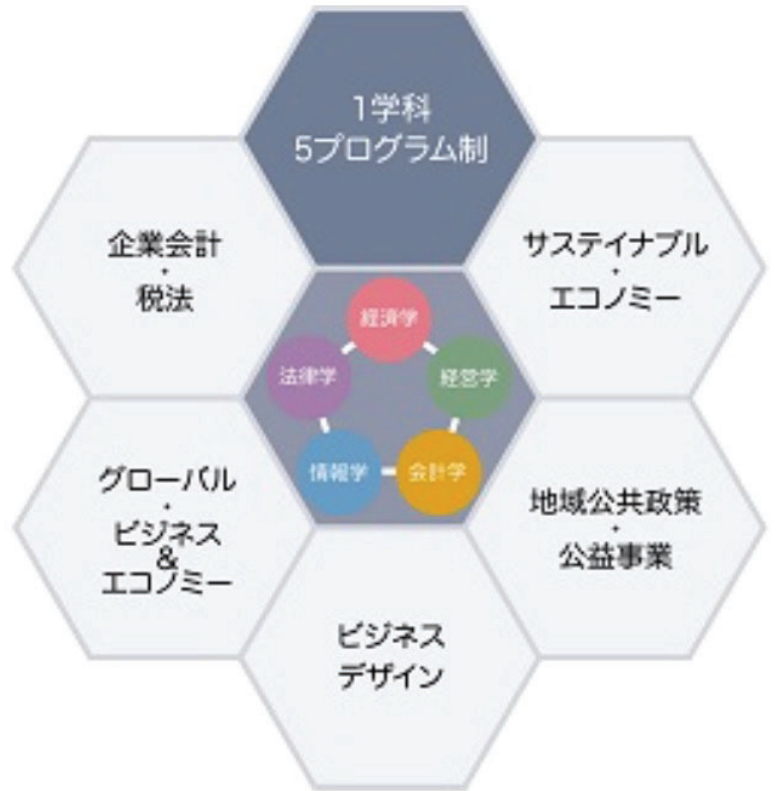
基礎演習IIの新設

- 夜間主の廃止に基づき， 2 単位分を基礎演習IIに配置
- 基礎演習IIは文献の輪読を主とする
→過去のコンサルテーションの役割の復活

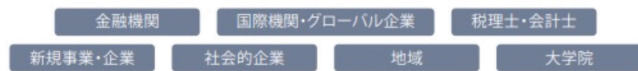
学部改組と初年次教育

学部改組 (2016年)

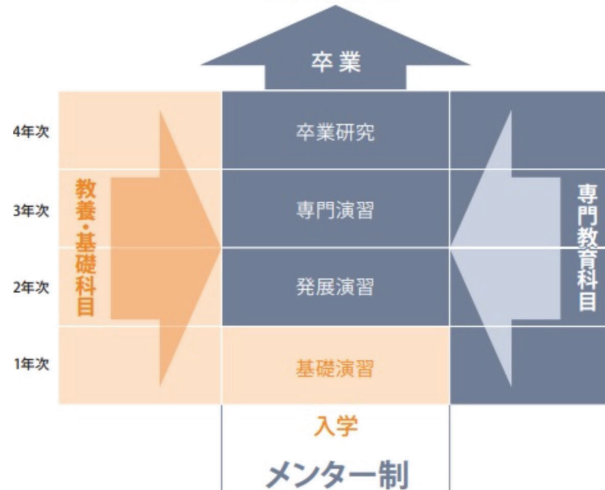
学科制からプログラム制へ



1年次からメンター制による少人数教育!!



幅広く活躍!



学部改組

メンター（助言者）によって、1年生の基礎演習、2年生の発展演習、3年生・4年生の専門演習を通じて、知識を持った複数のメンターが少人数制で学生一人ひとりの履修を指導。

将来の進路を見据えて選んだ各プログラムを通して、必修科目・選択必修科目・選択科目を体系的に履修し、卒業研究をまとめるサポート。

初年次教育の構成

授業科目：基礎演習，情報処理，キャリアデザイン

基礎演習

- ・ 大学生としての最低限のコミュニケーション能力を身につける
- ・ 人文・社会的な諸問題に積極的に関わっていく
- ・ 他者に自分の考え方を理解させるため，自分の考え方を裏付けるための証拠を調査し、それを利用する能力を身につける

- ・ 統一シラバス

基礎演習

基礎演習Ⅰ：会話・短い文章から適切に情報を引き出し、その内容を発表・文章形式で表現する。自分の考えを裏付けるためのエビデンス（証拠）を調査する方法を学ぶ。

基礎演習Ⅱ：政治・経済・社会問題を題材とする文献（新書）の内容を（学生が）説明する。グループワークを行い、他者と批判的に議論する。2000字程度のレポートまたは書評を作成する。

キャリアデザイン

- 「職業キャリア」だけではなく、「ライフキャリア」を取扱う
- 卒業後の進路を含め、今後どのように生きていくのか、どのような人生を歩んでいきたいかについて考える。
- 1年生の後半から進んでいく出口（進路）とプログラム選択を意識し、自身の大学生活のデザインを描く。

キャリアデザイン入門のシラバス

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：アセスメント試験
- 第3回：キャリアデザインとは何か
- 第4回：大学での学びについて考える
- 第5回：自己理解（興味・関心）
- 第6回：自己理解（価値観）
- 第7回：自己理解（強み・能力）
- 第8回：ライフキャリアと人生設計

基礎演習Iのシラバス

- 第1回：自己紹介
- 第2回：新聞記事の紹介
- 第3回：文献・資料の調査方法。引用の仕方
- 第4回：問題の調査結果・対策をグループワークでまとめる
- 第5回：対策のプレゼンテーション
- 第6回：対策を文章化する
- 第7回：レポートの講評
- 第8回：再レポート講評

学生の発言を促す実践例

- ・ 教員は発言しない
効果：学生間の活発な討論が可能
- ・ 学生が質問を事前に紙に書いて提出する
効果：質問表をすでに提出しているので口頭発言しやすい
- ・ はじめに個人で考え，次にグループで考えをまとめる
効果：個人では発言しづらいが，グループでは発言できる

基礎演習の現在の問題点

- ・ 全ての教員は統一シラバスに基づいているが・・・。
- ・ 教員によって難易度が異なる
- ・ 教員によって重視する要素が異なる

おわりに

- 「職業」と「学問」をどう融合させるか?? →永遠の課題
- **メンター制度によって、初年次教育と専門研究を融合**
- 初年次教育（基礎演習）において、「職業」・「学問」に必要な汎用的能力（「読む・書く・話す」）を導入。
- 初年次教育にキャリア教育を設置する。
- ほとんどの教員が初年次教育と専門研究（ゼミナール）を開講する。
- 教員は、卒業論文指導のみならず、キャリアカウンセラーと連携しながら、キャリア支援をする。

引用文献

「学科・プログラム」，和歌山大学HP（2022年2月1日閲覧）

<https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/faculty/department/index.html>

「カリキュラム」，和歌山大学HP（2022年2月1日閲覧）

https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/faculty/faculty_curriculum/index.html

「キャリアデザイン入門シラバス」本庄麻美子氏（和歌山大学経済学部）提供資料

和歌山大学経済学部広報委員会『和歌山大学経済学部』各年

「基礎演習シラバス」，2007年，筆者作成資料